

# グリーンサイエンス21便り (14)



## 芋虫（スズメガの幼虫）の能力に驚かされる

海賀 信好（かいが のぶよし）お茶の水女子大学

生活科学部環境工学研究室 共同研究員

新型コロナウイルス感染拡大、掛け声ばかりで危険が迫ってくる東京、次の変異株が現れ全国へ拡大、このパンデミックで行動場所がなくなっている。

昨年の11月、事務所前の栽培容器で芋虫を数匹見つけた。緑色と黒の2種類がいて、まだ、きず菜の葉を食べている。頭を下にして葉を食べ、角の付いたお尻から丸い黒い糞を出す。水耕栽培の容器は白い発泡スチロールを用いており、この糞で虫がついたことはすぐに分かる。

屋上での水耕栽培では、毎年、すごい速さできず菜の葉を食べる昆虫類が出てくる。バツタ、芋虫、

青虫など、特に芋虫は日に日に身体は大きくなり、その後の行動は見たことがない。鳥に食べられるのかいつの間にかいなくなる。

なんと平面ではミミズと同じように体を伸ばしたり収縮したりして進む。すごい速さである。「おいおい、どこへ行くの」と。長さ約7cm。芋虫がどんなところで蛹になるのか見ることがない。新しいきず菜の葉を前に置いて食べても食べない。ひたすら前進、それもどこかへ急いでいる。

どこかへ、どこかへ、隠れるとこを探しているようだ。コンクリートと土の間へ頭を入れて何をしているのか。硬い土のなかへ体を

入っていく。頭かくして尻かくさずの状態、「どうせ硬くて入れなかった」と出てくるものと眺めていたが、あきらめることなく体を収縮させて潜り込んでいく。すごい力である。約40分で全身土の中に身を沈めた。乾いた硬い土の表面から、なぜ7

cmもの体をこの下に潜り込ませられると判断できるのか、コンクリートと土との間に何かありそうである。南側の太陽の当たるコンクリート、来年に向け安心して蛹になれるのであろう。お見事であり、この芋虫を羨ましく思う。

パンデミック宣言1年「自然を守る事が人類を守る」と、NYタイムズ（朝日新聞）より、特に人間は地球上の他の生物とは違うという思い上がりによる活動で、イスラエルの研究によると、これまでつくり出したコンクリートやプラスチックなどの総量は、森林や植物などの自然由来のものよりも多くなる見込みと。建物のほか

道路などインフラ分野で1兆1千億トン、プラスチック製品はゴミになった分も含めて80億トン、一方、森林や植物の総量は、9千億トン、陸と海の動物などは40億トンにとどまっていると。

エネルギーの変換が急務と太陽光パネルを広げ、電気は得られなくても60℃以上になる熱の処理ができない。地球は熱くなるばかりだが誰も論じない。地面に潜って、数年、蟬のように土の中で暮らさなければと思っていたところ、ワクチン接種のお知らせがポストに。

